モンゴル国の地方に暮らす人々の遊牧と定住をめぐる移動と世帯間協力

—ドンドゴビ県デレン郡の一家族の生活史を中心に—

風戸 真理

リトルワールド研究報告　第18号　別冊
野外民族博物館リトルワールド　2002年

モンゴル国の地方に暮らす人々の遊牧と定住をめぐる移動と世帯間協力
—ドンドゴビ県デレン郡の一家族の生活史を中心に—

風戸 真理（京都大学大学院）

1. はじめに
2. 調査方法と調査地
   2-1. 調査地概況
   2-2. 歴史
   2-3. DDの家族
3. デレン郡における人々の暮らしと社会変化
   3-1. ①未組織な個人経営の遊牧の時代：草原におけるDDとBzの幼年、青年時代
   3-2. ②社会主義体制下における牧畜集団化の時代：定住区と草原でのDD夫婦の生活と子育て
   3-3. ③市場経済への移行期、民営化の時代へ：DD夫婦は草原へ、BJとTLは失業に
4. デレン郡における生活の現状
   4-1. DD家：DDらと共に草原で遊牧生活をすることを選んだOt夫婦
   4-2. DD家と子どもたちの世帯との関係：草原と定住区を行き来するBJ家とTL家
   4-3. 家族内での協力関係のバリエーション
5. おわりに

1. はじめに

モンゴル国[1]は1989年末の民主化運動以降、民主化と市場経済化という社会変化の過程にある。地方に暮らすモンゴル人は古くから家畜を飼育し、家畜に依存して生活してきたが、社会主義時代には集団化政策のもとに牧畜協同組合の組合員として組織され、組合の家畜を預かって管理する暮らしに変わった。ところが、1991年に牧畜協同組合が解散し、家畜が全面的に私有化されると牧民の社会と生活は再び大きく変化したのである。

牧民の生活にあらわれた顕著な変化に注目することにより、モンゴルの社会を歴史的に3つの時期に区分することができる。①1950年代末まで；未組織な個人経営の遊牧の時代、②1950年代末以降1980年代末まで；社会主義体制下における牧畜集団化の時代、③1990年代初頭以降；市場経済への移行期、民営化の時代、である（稲村 2001:30）。

時代区分の②の「社会主義体制下における牧畜集団化の時代」に進められた政策は、時期や地域による差もあるが大まかにいえば次の2点である。一つめは、それまで、封建貴族やチベット仏教の寺院など少数の個人や宗教組織によって占有されていた多くの家畜や土地が公有化されたことである。二つめは、小規模の個人経営の牧民たちを牧畜の協同組合のメンバーとして組織し、メンバーの家畜の一部を共有化していったことである。協同組合はネグデル（*negdel*）［(1) 統一、連合、(2) 協同組合］[2]とよばれ、社会主義的な経済計画によって牧畜業を集団化し、集約的な経営を行うことで生産性を向上させるという基本理念をもっていた。

時代区分の③「市場経済への移行期、民営化の時代」へのきっかけとなったのは、ソ連のペレストロイカの影響を受けてモンゴルでも始まった民主化運動である。1989年末の民主化デモを契機として国家の体制が次々と変えられ、1992年には民主憲法が採択され、国名も「モンゴル人民共和国」（*Bu'gd Nairamdakh Mongol Ard Uls*）から「モンゴル国」（*Mongol Uls*）へと変わった[3]。牧畜の分野では、「1991年末にはほとんどのネグデルが民営化され、1994年ごろまでに、家畜のほとんどが私有化された」（稲村 2001:30）。

市場経済化の影響の下で牧畜に現れた変化として、内外の開発援助団体はおおむね共通した次の諸点を指摘している。例えば国際協力事業団の報告書では、1）経営規模の小さい牧民の数が多すぎること（国際協力事業団 1997:32）、2）牧畜従事者が増えたが、これは牧畜技術に必ずしも習熟していない牧民の数が増えていることを意味するということ（同:37）、3）国全体の家畜頭数が増加し、計算された草地の支持力を越えていること（同:33）、などが社会、経済的な問題点として指摘されている。

経営規模については次のような説明がなされている。「通常、家畜を200頭以上所

有すれば、多少とも余裕のある経営が可能で、100頭に満たなければ貧しい層、10頭未満は極貧層に数えられる」(国際協力事業団 1997:32)。UNDP(国連開発計画)は経営規模について、1999年冬から2000年春にかけてモンゴルを全国的に襲った雪害(zud)との関連で次のように述べている。「所有家畜頭数が100頭未満の世帯はこれ以上の家畜の減少があれば壊滅的な打撃を受け、所有家畜頭数が200頭未満の世帯は生存ぎりぎりの生活の境界線の下に落ちる可能性がある (Herders with less than 100 animals are most vulnerable to further loss of animals, while herders with less than 200 animals may drop below the subsistence threshold.)」(UNDP 2000)。すなわち、所有家畜頭数100頭が貧困ラインとされていて、それ以下の世帯は「貧困世帯」と位置づけられるのである。

牧畜への新規参入者の数については、モンゴル国立統計局発行の統計資料に依拠して1990年と2000年の「牧畜世帯の数」(number of herdsmen's household)および「牧民の数」(number of herdsmen)を比べると、「牧畜世帯の数」は2.6倍 (7万4710世帯から19万1526世帯) に、「牧民の数」は2.9倍(14万7508人から42万1392人)に増えている(National Statistical Office of Mongolia 2000 :132-133)。

本論の第一の目的は、開発援助において問題視されている諸変化のうち、「牧畜への新規参入者の経験の問題」と「牧畜世帯の経営規模」の2点を、歴史的な視点をもって批判的に検討することである。本論のもう一つの目的は、資料が多いとは言えないネグデル時代以前の一般牧民たちの生活に関して、ライフ・ヒストリーの記録を提示することである。

「牧畜への新規参入者」として個人が新たに牧畜に従事する場合もあるが、本論では世帯を単位としてこの問題を扱う。そうすると、統計上の「牧畜世帯」の増加が意味するのは本当に、これまで定住地で生活していて牧畜に従事したことのない多くの世帯が、草原で家畜を飼う「牧畜世帯」に転身するということがモンゴル国の随所で起こっている、ということなのだろうか。次に、「牧畜世帯の経営規模」に関しては、筆者は次のような疑問をもっている。牧畜を生業とする人々の生活の質は、彼らの属する世帯が所有する家畜頭数によって一義的に決まるものなのだろうか。言い換えれば、世帯はどの程度経済的に自律しているのか、ということである。

具体的には、ある家族のメンバーたちのライフ・ヒストリーの聞き取りと現在の生活に関する参与観察調査に基づき、人々が居住地をいかに選択しているのかに注目しながら地方の人々の生活史を記述していく。筆者はこれまでにアルハンガイ県チョロート郡での調査から次のことを明らかにしてきた。モンゴルの牧民たちは家畜管理の必要上、草原を季節的に遊動している。そして妻方、夫方双方の親子関係を中心とした親戚や知人同士が共にキャンプして家畜管理の労働を協力して行っているのである(風戸 1999:36-39)。このことをふまえて、本論では次のような2つの新しい視点を取り上げる。一つは、地方の人々の移動を長期的に見ると、草原だけ

でなく郡や県の中心地に設置された定住区が人生の様々な段階で居住地として選択されていることである。二つ目は、草原と定住区に分散して居住する親族も深い協力関係にあることである。さらに、このような居住地選択と家族間の協力には、学校教育と家畜管理が密接に関与していることを含めて論じていく。

2. 調査方法と調査地

筆者はモンゴル国ドンドゴビ県（*Dundgov'aimag*）デレン郡（*Deren sum*）の一牧民の移動式天幕であるゲル（*ger*）（写真1）に住み込み、2001年6月11日から6月30日までと、8月14日から9月16日までの合計53日間の調査を行った。

写真1 ＤＤ家のゲルと家畜(ヒツジ・ヤギ)とＤＤ家のトラック。
2001年の秋営地にて。

2-1. 調査地概況

調査地のデレン郡は、首都ウラーンバートル（*Ulaanbaatar*）から南へ210kmのところにある39万haの面積をもつ行政領域である（図1参照）。植生は砂漠性草原で、地理的にはなだらかな小丘がほとんどだが、砂漠性の強い地域には窪みがたくさんある（デレン郡1980年代後半）。

当郡の主な産業は牧畜であり、飼養されている家畜はウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダの5種類である。郡役場作成の統計によれば、その合計頭数は10万5108頭である（2000年12月調べ）。家畜の利用方法としては、すべての種類の家畜は食肉として利用され、皮革はなめされる。搾乳の対象とされるのはラクダ以外の4種類の家畜である。モンゴルにはラクダを搾乳する地域もあるが、デレン郡の多くの世帯では少頭数の去勢オスを主に荷駄、騎乗の目的で利用するために飼育している。そして、

全種類の家畜が毎年適当な時期に毛刈りされる。

郡役場の統計によれば、2000年12月の時点の郡の人口は2600人、世帯数は612戸である。このうち463世帯が「草原の牧民」(*kho'doo malchin*) ないしは「牧民の世帯」(*malchin ail*) と表現され、草原に住居をおいて牧畜に従事している。本論ではこのような世帯を「牧畜世帯」とよぶ。それ以外の世帯は公務員や教師などの有職者か通学児童のいる家庭で、郡や県の中心地に一時的あるいは恒常的に居住しているものと考えてよい。

郡や県の中心地には役場、学校、診療所、病院などの公共サービス施設が集中していると同時に人口も集中しており、家畜飼育には適さない。このような地域のことをモンゴル語ではトゥブ (*to'v*) [中心] というが、本論では「定住区」とよぶ。これに対して「定住区」の周囲に広がる土地はモンゴル語でフドゥー (*kho'doo*) [(1) 平原、草原、(2) (都市に対して) 田舎、地方] とよばれるが、本論では「草原」

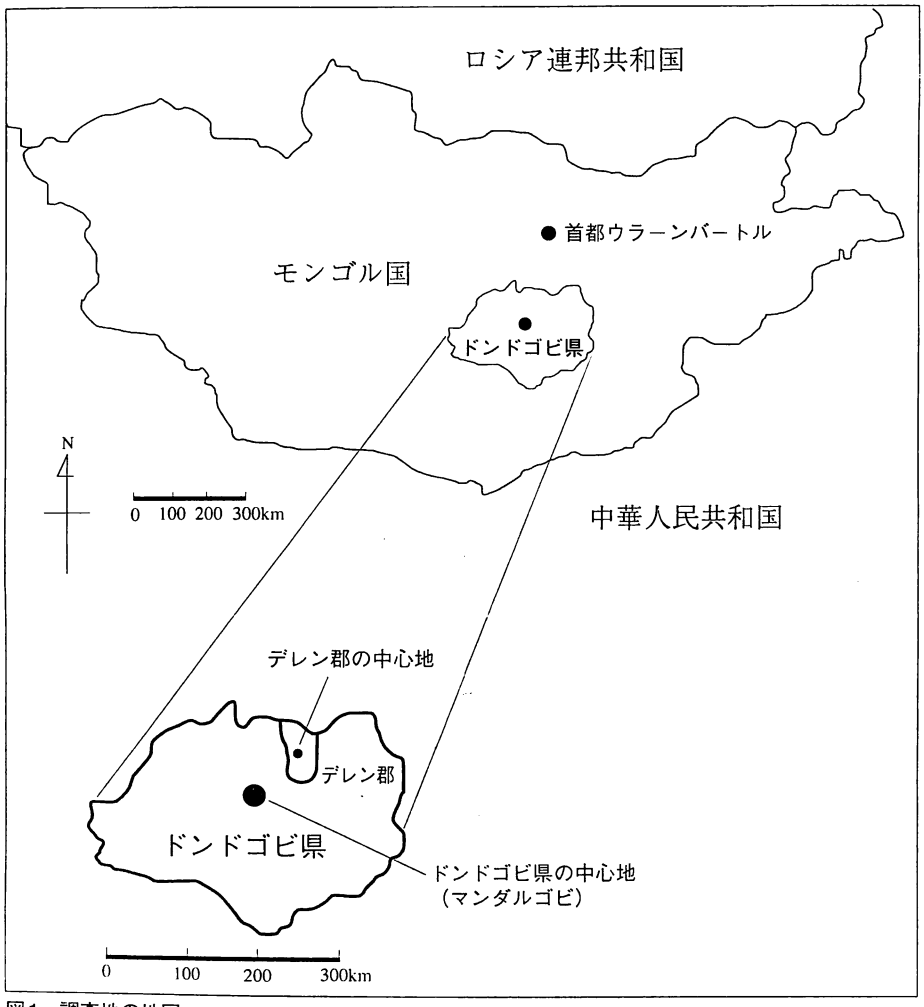

図1 調査地の地図

とよぶことにする。デレン郡内の定住区は郡の中心地のみである。

デレン郡には現在、第1から第4までの4つのバク（*bag*）がある。バクというのは固有の領域をもつ地方行政の末端組織で、ふつう行政区と訳される。社会主義時代にはバクの中心地も定住区となっていたが、現在ではほとんど機能していない。デレン郡ではすべての世帯がいずれかのバクに所属しているが、あるバクに所属する世帯が郡の中心の定住区に滞留したり、他のバクや郡や県の領域内で一時的にキャンプする場合にその所属を変更する必要はない。

2-2. 歴史

当郡の歴史は、1921年に起きた人民革命後まもなくの1924年に、モンゴル人民共和国ボグド・ハーン・オール県（*Bogd khaan uul aimag*）のデルゲルツォクト・オール旗（*Delgertsogt uul khoshuu*）[4] 内にデレン郡が置かれたときに始まる（デレン郡 1980年代後半）。その後、地方行政改革によって1930年代はじめにデレン郡はトゥブ県に組み込まれ、1940年代はじめにドンドゴビ県が設置されるとこちらへ移管された。

1954年、ナイラムダル（*Nairamdal*）［平和、友好］という名称のネグデル（牧畜協同組合）がデレン郡に創設された（デレン郡 1980年代後半）。当初、ドンドゴビ県は全国でも牧民の協同組合化の度合いが低い4県のうちのひとつに数えられていたが、1958年から1961年までの三カ年計画の中で政府の主導による協同組合化運動が全国的に展開された結果、個人経営だった牧民の大半が組合員として組織されていった（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1969-2:140）。これによりデレン郡は、先の時代区分の②に移行していく。国の農牧業政策が牧民たちをネグデルのメンバーとして組織していった後、彼らの私的所有下にあった家畜もまた国家の介入によって組合の共同所有へと移されていった（小貫 1993:235）。

1991年、全国でのネグデルの解散と時を同じくしてデレン郡のネグデルも解散し、ネグデルの家畜や農機具は牧民たちを中心に分配された。

2-3. ＤＤの家族

住み込み調査をさせてもらった家はDD（77歳、男性）[5] を「家の主」（*geriin ezen*）、つまり世帯主とすることから、デレン郡の牧民の間では「DDのもの」（*DD-giinkh*）とよばれていた。本論ではこれをDD家とする。DD家は遊動しながらウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダを維持してこれを利用する「牧畜世帯」である。「牧畜世帯」はすでに述べたように役場の登録上のカテゴリーであるが、本論では世帯の定義を、同居し、消費を共にし、登録上、家畜を共同で所有する人々の集団とする。

DDとその妻Bz（64歳、女性）の間には5人の成人した子がいる（図2）。長男BJ

(41歳)、次男TL（38歳)、長女Tg（35歳)、三男DJ（32歳)、次女Ot（23歳）である。長男BJと次男TLはそれぞれ結婚してデレン郡の中心地に住み、長女Tgも既婚でドンドゴビ県の中心地に住んでいる。三男DJと次女Otは両親と同居して草原で遊牧生活を送っていた。三男DJは未婚であるが、次女Otは結婚していて、夫（25歳）と子ども（3歳、男児）がいる。DD家の世帯メンバーは、DD夫婦と未婚の三男、そしてOt夫婦とその子という3世代にわたる拡大家族からなり、成人男性3人と成人女性2人、幼児1人の合計6人が一つのゲルに住み、生計を共にしている。第4章で詳しく述べるが、モンゴルでは一般的に若い男女が結婚すると新しい世帯をなすので、DD家のようにひとつの世帯に2組以上の夫婦がいることはまれである。

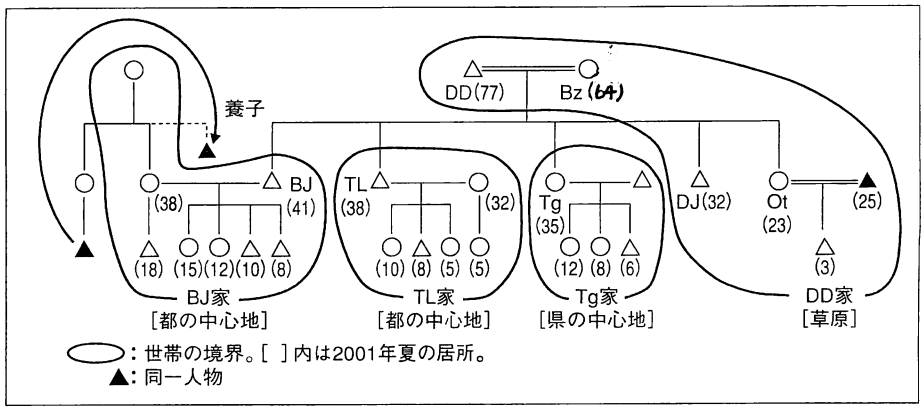

図2　DDの家族の血縁関係

モンゴル語ではひとつの世帯が所有するすべての家畜はその世帯の「世帯主のもの」({男性世帯主の名前}-*giinkh*) と表現される。行政上も、家畜は世帯主の名義で登録されていて、毎年末の頭数調査および課税の対象となっている[6]。調査時点でDD家が所有していた家畜の頭数は表1のとおりである。

行政的にはDD家はデレン郡の第1バクに所属している。郡役場の統計によれば、第1バクに所属する約150世帯のうち138世帯が「牧畜世帯」である。この138の「牧畜世帯」を、所有している家畜の頭数によって分類すると、もっとも家畜頭数が少ない世帯は27頭、多い世帯は607頭を所有している（図3)。中央値は103頭であり、DD家は当時209頭を所有していたので、バク

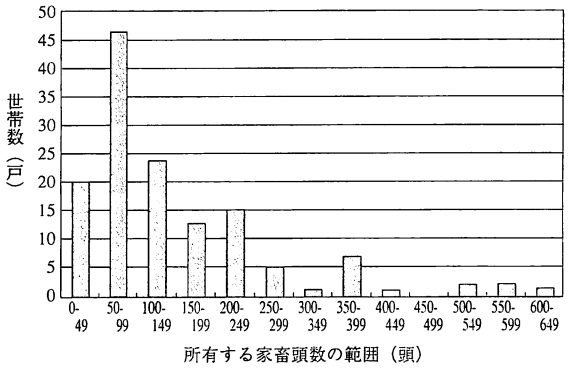

図3　デレン郡第1バクの牧畜世帯の経営規模の分布
＊デレン郡役場作成の統計をもとに作成した。

の中で比較的豊かな「牧畜世帯」だったといえる。なお、所有家畜頭数が100頭未満の世帯を「貧困世帯」とみなすとすれば、その数は67あり、全体の48.6%を占めている（以上、2000年12月調べの統計資料より）。

ところで、定住区に住んでいる息子や娘も家畜を所有している。ただし、BJ、TL、Tgらは定住区に住んでいるため、家畜の全部または一部をDD家に預けている。DD家は、婚出した3人の子の家畜に加え、知人[7] 1人の家畜も預かっていて、これら家畜群をまとめて管理しているのである。DD家が放牧管理する家畜の頭数とそのうちわけは表2のとおりである。

家畜の種類			頭数（頭）
種	カテゴリー	カテゴリー別	種別小計
ヒツジ	当歳仔	36	
	明け2歳仔	14	
	成熟したメス	48	
	去勢されたオス	9	
	種オス	0	
			107
ヤギ	当歳仔	4	
	明け2歳仔	5	
	成熟したメス	46	
	去勢されたオス	29	
	種オス	1	
			85
ウシ	当歳仔	0	
	明け2歳仔	1	
	未経産メス	1	
	経産メス	1	
	去勢されたオス	0	
	種オス	0	
			3
ウマ	当歳仔	4	
	明け2歳仔	0	
	未経産メス	0	
	経産メス	5	
	去勢されたオス	8	
	種オス	1	
			18
	ラクダ当歳仔	0	
	明け2歳仔	0	
	未経産メス	1	
	経産メス	0	
	去勢されたオス	2	
	種オス	0	
			3
合計			216

表1　DD家が所有する家畜の頭数
*2001年8月調べ
*当歳仔は0-12か月齢、明け2歳仔は12-24か月齢の未成熟個体

家畜の種類	所有者				合　計
	DD	TL	BJ	知人	
ヒツジ	107	9	0	2	118
ヤギ	85	8	8	4	105
ウシ	3	0	3	0	6
ウマ	18	3	6	0	27
ラクダ	3	0	0	0	3
合計	216	20	17	6	259

表2　DD家が管理する家畜の頭数（頭）
*2001年夏調べ
*Tgの所有する家畜の頭数はDD家の家畜頭数に含まれているが、その数はわずかである。

3. デレン郡における人々の暮らしと社会変化

本章では「はじめに」に記した時代区分の①、②、③の各時期における地方の人々の生活を、居住地選択に焦点をあてて記述していく。

3-1. ①未組織な個人経営の遊牧の時代：草原におけるＤＤとＢｚの幼年、青年時代

1925年、DDはデレン郡東北部のタルランギーン・ホショー（*Tarlangiin khoshuu*）という場所にあった春営地に生まれた。5人キョウダイの3番目だったが、DDは親戚の遊牧家庭に養子に出されて育った。

多少物心がついた頃、母の兄であり僧侶であったシャラブ（D. Sharav）に師事し、チベット仏教の教理、日常的な宗教実践、チベット語で書かれた仏典の読み方などを習い覚えた。1930年代末までのデレン郡には、後にバクの中心地となった場所などにいくつもの寺院や廟があって、少年たちがそこで宗教教育を受けていた[8]。1940年にデレン郡には4年制の近代教育学校ができたが、その頃には多くの寺院や廟が革命政府によって破

写真2　ＤＤ氏、77歳。読経のために近隣の牧畜家を訪れ、嗅ぎたばこで一服している。机上には教典が開かれている。

壊された。

DDは幼時に受けた教育によって僧侶（*lama*）となったが、仏教施設が破壊されたのにともなって僧侶たちも粛正にあい、逮捕されたり処刑されたりした。師であった母の兄も逮捕されたが釈放されて1970年代まで生きた。DD自身は社会主義時代には僧侶として目立ったことをせず、無事だった。今ではDDはデレン郡に住むただ一人の僧として重宝され、地域の雨乞い儀礼や家々の平時の仏事や冠婚葬祭にしばしば呼ばれていっては読経し、儀礼を司っている（写真2）。

当時のデレン郡の牧畜状況としては、1000頭もの家畜を所有する豊かな世帯がいくつもある一方で、少数の家畜しかもたない世帯が多かった。そして、豊かな世帯と貧しい世帯は2世帯で一緒にキャンプして、家畜管理労働と食事などを相互に利用しあっていたという。

ところが、デレン郡は1944年の冬から翌年の春にかけて、酷いゾドに襲われた。吉田によれば、ゾドの原因には、積雪過多、降雪過多、無積雪、酷寒、猛吹雪、気温上昇の後の気温低下による牧地のアイスバーン化などの個別のもの（吉田 1980）のほか、これらの複合状況（吉田 1982）があり、ゾドになると家畜が大量に死ぬ。このときのデレン郡では家畜が次々と失われていく中で、一部の人々が生き残った家畜を連れて南方のウムヌゴビ県へ遠距離放牧（*otor*）[9]へ出かけた。DDの家からも牧夫がウマの群れを連れ出して南方へ向かい、道々キャンプしながら何日もかけて群れを導いていった。ところが、ある朝起きてみると、馬群がみあたらない。どうやら群れは中国との国境を越えて南進して行ったらしい。牧夫は馬群を探すために国境警備員に気づかれないように中国の内蒙古に入った。そこでずいぶん探し回ったが、知人もいない土地では行方不明になった家畜を探し出すのは難しく、このとき馬群の大部分を失ったという。このような二次災害も含めたゾドの被害は甚大で、「どんな豊かな家にもほとんど何も残らないくらい多くの家畜が死んだ」という。

DDは1944年の秋、20歳で徴兵された。DDらデレン郡の青年たちは日本軍と対峙する東部国境付近へ自動車で送られた。兵役中の主な任務は高位軍人の護衛で、昼も夜も歩哨に立った。戦闘には参加しなかったので、DDは日本人を目撃はしたが、狙撃したことも殺したこともないという。兵役中には毎月10トゥグルク（*t'ogrog*）の給料をもらっていた。

5年間の兵役義務を終えて故郷へ戻った後、DDは獣医師としてデレン郡の中心地で働き始めた。当時、牧畜の生産増大のために家畜衛生を向上させることの重要性が政策的に注目され、数か月程度の短期講習会を行って獣医師や家畜技師を増やし、地方に専門家を普及させる事業が進められていた（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1969）。DDは学校では一度も学んだことがないというが、子ども時代に受けた宗教教育でタンガトとよばれるチベット語で書かれた仏典の読み方を身につけ、兵

役中にはキリル文字でのモンゴル語の読み書き及び計算法を習得した。さらに、復員後には獣医師になるための講習会等を受講したのであろう。

1957年頃にDDは、郡役場の会計係として働いていたBzと知り合って結婚した。当時、デレン郡の中心地ではターンツ（*tants*）とよばれるダンス・パーティーやコンツェルト（*kontsert*）とよばれる芸能大会がしばしば開かれていた。ターンツでは蓄音機の音楽にのって社交ダンスを踊ったという。コンツェルトでは楽才のある地元の人々が楽器を弾いたり歌ったり踊ったりした。伝統的な長唄（*urtyn duu*）とあわせて演奏される馬頭琴のほかに、マンドリン、アコーディオン、ギター、40歳と70歳の人だけが上手に弾けるといわれた撥弦楽器（*do'chin hu'nii tovshuur*）、バイオリンのような弦楽器（*yoochin*）などが入ってきた。コンツェルトでは、鉄の手作り楽器を演奏する人や、40リットルのミルク缶をおたまでたたく人もいた。DD、Bzら若い男女はそんな催し物にも出かけていた。

次に、Bzの生い立ちを紹介したい（写真3）。Bzは、1938年にデレン郡北部のナラン・オール（*Naran uul*）の周りで遊動していた牧民の家に生まれた。Bzの父にあたる人は牧民であると同時に鍛冶技術者（*darkhan*）でもあった。ふだんは家畜の世話などをしているが、人に頼まれるとふいごを使って金属を打ち鍛えた。鉄では、馬具に欠かせない金属部品である鐙や腹帯の留め金、そして水汲みなどに使う小型の運搬車などをつくった。銅や銀などに細かい細工をほどこして耳飾りや腕輪なども作った。けれどもこの男性について、「これはおまえの本当の父ではない」とBzに言う人々もいて実父かどうかもわからないが、Bzが生まれたときから母と連れ添っていた人だった。

写真3 Bz氏、64歳。フェルトづくりの途中、馬乳酒を飲んで休憩している。

Bzは長女で、妹と2人姉妹だったが、母は妹の方をかわいがり、子どもに恵まれない夫婦から娘を養子にくれるように頼まれたときに母はBzを与えた。Bzがまだ小学校へ上がる前の幼い頃だった。

養子先では一人娘として大切にされた。学校へも行かせてもらった。BzはDDよりも13歳年下であるが、彼女の子ども時代にはデレン郡に4年制の公教育学校があり、Bzは1948年に10歳で入学した。1学年に2学級あり、Bzの同級生は25人で、そのうちの7人が女の子だった。当時、郡の役人が家々を訪問して子どもを学校へ入れるように勧誘したが、牧民の家庭では働き手であった子どもを家から連れて行かれるのをいやがり、子どもを物置用の小さなゲルに隠したりして抵抗したという。実

家の妹は学校へは行っていなかった。Bzが学校で習ったことでよく覚えているのは、アメリカとイギリスの2国が戦争を始めるのが好きな悪い国だと教えられたことである。

一方、家庭では養父から口頭で経を習った。養父は僧侶で、今のDDと同様に地域の仏事に呼ばれていっては読経や儀礼を行っていた。Bzはチベット語の経文の1語1語の意味はわからないが、6つの経をチベット語で暗記した。それぞれの経には具体的な効能や祈祷対象があり、例えば4番目に読む経「メグゼン」は「天の轟きに効く」(*Tengeriin duund sain*) ということで、雷よけ等の効果があるという。Bzは今夕も寝台の上に腰を下ろし、数珠を繰りながら6つの経を順番に静かに唱えていることだろう。

ところが、Bzが小学校に上がって間もない頃に養母が亡くなった。これに続いて養父も4年生のときに死んでしまった。孤児となったBzは実家に戻ったが、実家の居心地はあまりよくなかった。しばらくして実家の父も死んでしまった。Bzは隣の郡の学校の上級課程に進学する希望をもっていたが、これは叶わず4年間の初等科を卒業するのがやっとだった。一方で、実家に戻った後も養父母の親族とは親戚関係が続き、行政登録上もBzは今に至るまで養父の子である。

3-2. ②社会主義体制下における牧畜集団化の時代：定住区と草原でのＤＤ夫婦の生活と子育て

DDとBzの2人が結婚した1950年代後半にデレン郡の牧民社会は、組合化、集団化へ向かう急激な変化のさなかにあった。牧民たちの家畜も1世帯あたり75頭を残して国家権力に接収されたという。その頃の農牧業政策に照らせば、1955年に開かれた第1回ネグデル員会議で承認された模範定款が1959年の第2回ネグデル員会議で増補・訂正され、ゴビ地方での私有家畜の上限が1人15頭、1家族75頭以下とされた(坂本 1969:86) ことに相当すると考えられる。

そのような時代背景もあってDDとBzの結婚に際して婚資のやりとりはなかった。また当時は、婚出する子に親が新しいゲルや家財道具一式を買いそろえて与えるという現在行われているような慣習はなく、若者たちは自力でなんとかしていたという。DDとBzは2人で働いて得た給料で少しずつ必要な家財を揃えていった。DDとBzには、結婚後しばらくして子どもが生まれた。

そして、2人は転職してネグデルの組合員となり、定住区から草原に出て牧畜の仕事に従事するようになった。ネグデルの家畜の群れを預かって世話をする家畜管理労働者の仕事には、時期ごとに畜産物の収穫と供出のノルマがあった。その上、燃料用の牛糞などを自家用以外に大量に集めて供出しなければならなかった。賃金は労働日数によって支払われたが、DDを含む牧民たちはネグデル時代の激しい労働に

よって消耗したという。

1970年、長男のBJがデレン郡の中心地にある小学校へ入学するのにあわせてDD一家は再び定住区（写真4）へ引っ越した。DDは定住区では獣医師として働き、Bzは郡役場の会計係のほかネグデルの事務所で会計や事務など様々な職に就いたという。定住区で勤めている間には、牧民は他の仕事についている人よりも行政によって優遇されているとDDが感じることもあった。家畜囲いの掃除、ヒツジの毛刈り、秋の肥育放牧などの際に労働力が不足すると、牧民は役場に頼めば人手を派遣してもらうことができたのである。そして、DDらはしばしばこのような牧畜作業に駆り出されたという。

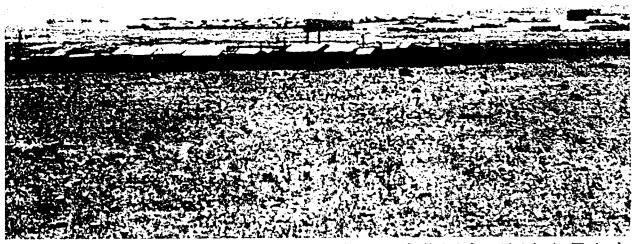

写真4　ドンドゴビ県デレン郡の中心地の定住区を西側から見たもの。ほぼ全景。

1970年生まれの三男DJが子どもだった頃、デレン郡にはロシア人兵士がたくさん来ていた。DD家にも若いロシア兵が何泊かしたことがある。DJの記憶では、ロシア兵はやさしかったが、汚らしかった。若い兵士は長い間洗っていないような服を着ていた。Bzは若い兵士の服を洗濯してあげようと思い、洗濯用のたらいに水を溜めてそれを指し示したりして身振りをまじえながら、「服を洗ってあげるから脱ぎなさい」と言った。しかし、ロシア兵は服を脱がなかった。きっと服を盗られると思ったのだろうとBzは当時のことを思い出して語った。

1980年代前半にDD家は再び草原に引っ越した。3年生だったDJが学校を中退した頃である。当時のネグデルの家畜管理体制においては、1年ごとに種類のちがう家畜の群れをネグデルから受け取って世話し、1年後にこれをネグデルに返すことになっていた。翌年には別の種類の家畜の群れを受け取るというしくみで、誰でもあらゆる種類の家畜を担当した。DD家はウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダのみならずブタの飼育をしたこともある。実際に世話をしたのはラクダがもっとも多く、その期間は通算6、7年になるだろう。ヒツジ・ヤギの場合、混合家畜群とよばれてまとめて一群として扱われ、一度に合計700-800頭を担当した。これは、明け2歳仔（12-24か月齢）を1年間肥育して翌年に食肉用に出荷するというパターンが多かった。

1985年、DDは満60歳を迎えて年金受給者となった。1980年代後半にDD家は再び定住区に移ったが、間もなくBzも満50歳で年金受給開始年齢に達して会計の仕事から退いた。年金受給開始年齢は一般に男性は60歳、女性は55歳である。ただし、子どもを5人以上生んだ女性には5年早く年金給付が開始される。国策として人口増加

が図られ、出産が奨励されるようになっていた時期に5人の子どもを生み育てたBzは、母親としての国家への貢献を評価されて年金受給において優遇措置を受けたのである。

以上をまとめると、②の時期はDDとBzの2人にとっては、結婚し、働き、子どもを育てた成年期および壮年期にあたる。2人は定住地と草原とを行き来しながら、子どもたちを定住区にある学校へ通わせてきた。教育を受けていた2人は獣医師という資格職や会計などの事務職につくことができたので、子どもの教育などの都合で定住区での生活を希望する場合に仕事をみつけるのが比較的楽だったであろう。一方で、遊牧民の家庭に育った2人は牧畜の仕事の経験があったので、ネグデルの家畜管理労働者として草原で働くこともできた。また、定住区の住人も、牧繁期には好むと好まざるとにかかわらず牧畜作業の補助のために草原に駆り出されたというDDの語りからは、デレン郡に住む人であれば誰でも多かれ少なかれ牧畜に関わっていたことが窺える。

社会状況についていえば、デレン郡は首都から離れていたにもかかわらず、ロシア兵が庶民の生活にまで入り込んでいたことも注目に値する。デレン郡の人々が体験した革命や社会主義建設事業には、宗教の弾圧、近代公教育の導入、コンツェルト等に代表される文化活動、牧畜業の集団化などがあるが、これに加えて軍事的なソ連との関係が身近なものとして捉えられていたのである。

後にDDとBzが年金受給年齢に達して社会主義建設下における労働義務から解放されたのは、モンゴル、そしてソ連の社会主義時代が終わりを告げる時期とくしくも重なっていた。

3-3. ③市場経済への移行期、民営化の時代へ：DD夫婦は草原へ、BJとTLは失業に

時代区分の③の時期には、国家レベルでは社会主義が放棄されて民主化への模索が始まった。牧畜分野においては、ネグデルによる牧民社会の組織化と国家調達制度による流通統制がなくなって、市場経済化の中で各世帯が自律的な牧畜経営を始めるという大変化があった。3つの時代区分の中でも③は社会主義の放棄から現在につながる移行を問題としているところに特徴があるので、この節では少し過去に遡ってその変化の様相を捉えていきたい。

DD家の暮らしに起こった変化としては、年金生活者となったDDとBzは1990年、「草原に出た」（*kho'doo garsan*）という。とはいえ、そのときには末娘のOtがまだ初等学校の低学年だったので定住区にも住居を残していた。しかし1995年、Otが7年生のときにDD家は定住区の住居も引き払い、生活の本拠地を完全に草原に移した。居住地の移動と同時に、DDとBz自身の立場も、社会に奉仕する労働者という身分を退いて自由な放牧者に変わっていた。社会変化の過程は、定住区の世帯だったDD

家が草原の「牧畜世帯」に変わっていく過程と重なるのである。

このような選択が可能となった背景には、DDとBzの2人が遊牧民の家庭に育ち、ネグデルの家畜管理労働者として働いたり、定住区に住んでいても牧繁期には牧畜作業の補助を行ったりした経験を有し、DDの場合には獣医師の研修と実務経験を積んでいたことがある。これに加えて、ネグデル時代にも私有家畜を維持することが頭数制限付きではあったが認められていて、DD家にはこの制度を利用して蓄積してきた私有家畜があったこと重要である。

DDによれば、現在のDD家の馬群はDDが10代後半の頃に50トゥグルクで買った3歳の未経産ウマ（*shudlen baidas*）に始まる。このメスウマの子孫は幾多のゾドを乗り越えて途切れることなく続き、増えて増えて何千トゥグルク分にもなったという。DDの人生で最悪だった1944年から1945年にかけてのゾドのときもこのメスウマは生き残り、1999-2001年のゾドを経た今もこのメスウマの子孫たちがDDの馬群の中に何頭もいる。このウマの家系はネグデル時代以前から60年間も続いてきたものである。DDとBzの夫婦は、このウマの家系の他にもネグデル時代から家系の続くヒツジ、ヤギなどの私有家畜を所有していて、これらを基盤として退職後に草原での生活を始めたのである。

次に、DD家の長男BJ（41歳）と次男TL（39歳）を例として、働き盛りに②から③への移行期を迎えた若い世代の人々が社会変化にどのように対応してきたのかをみていく。

長男のBJは1961年生まれである。幼い頃は家族共々草原で過ごしたが、BJの小学校入学にあわせて家族は郡の中心地へ引っ越した。BJの学生時代にはデレン郡の中心地にあった学校は8年制 だった。これを卒業した後、県の中心地にあった10年制学校に編入した。最初は学校の寮に住んだが、後にDDの実兄の家に寄宿した。2年間学んで1980年に10年の教育課程を修了した。

卒業式を終えて帰省した1か月半後、今度は徴兵されて再び家を離れた。兵役義務は3年間で、首都近郊のナライハ（*Nalaikha*）地区で機械技師として働いた。BJは優等生で、兵役中に表彰されたこともある。その時にはDDとBzがまだ乳児だった三男DJを抱いてBJを訪れ、兵舎に数泊した。BJの上官と一緒に撮影してもらった当時の記念写真が今もDD家のアルバムの中には保存されている。

1983年に復員したBJは、県の中心地にあった鉄製品の修理工場に就職した。結婚もした。再婚だった妻はザブハン（*Zavkhan*）県 の出身で、最初の夫の仕事の都合でドンドゴビ県に来ていたのが、離婚して1人息子を連れてBJと再婚した。その後、2人の間には4人の子どもが生まれた。

1989年、BJは工場を辞めてネグデルの家畜管理労働者に転職した。彼がネグデルに加入したとき、ネグデルは家畜管理に賃貸契約制を導入していた[10]。この制度ではかつてDDとBzが働いた頃とは異なり、ネグデルの牧民は給料を受け取ることはな

い。その代わり、牧民は一定数の家畜に対してネグデルに賃貸料を支払って一定期間（多くは3-5年）これを借り受け、その間に得られる畜産物の何割かを契約に基づいて自分のものとするのである（二木 1993:120）。BJが賃貸契約によって預かった家畜は、ヒツジ243頭、ヤギ57頭、ウマ42頭、ウシ27頭だったが、BJがネグデルで仕事を始めて1年半もたたないうちにネグデルは解散した。その時、ネグデルの牧民たちは賃貸契約によって預かっていた家畜の全部または一部を、家族の人数に応じて与えられるクーポン券と引き替えに私有財産として取得できた。BJはこのとき、自分の管理していた家畜の群れからヒツジ77頭、ヤギ25頭、ウマ28頭、ウシ17頭を得た。残りの家畜の一部は両親や兄弟姉妹の家族がクーポン券を使って取得することでその後もBJの管理する群れにとどまった。それでも余った分は他の人々が得た。

BJの家族（以後、これをBJ家とよぶ。ほかの既婚の子どもの家族についても同じとする。）はその後しばらくは遊牧生活を続けていたが、子どもたちの多くが小学校に通うようになると郡の定住区に引っ越した。

その後の生活については次章に譲ることにして、次に、次男のTLの生い立ちをみてみたい。TLは1964年生まれである。デレン郡の8年制学校を卒業後、郡の中心地で就職してネグデルの会計係として働いた。その後、徴兵されて2年間の兵役を勤める。戻ってからは、トラックや農牧業用トラクターの運転手として働いた。1989年に結婚し、子どもも3人できた。

ところが民主化によって失業した。ネグデルの解散直後に行われた牧民たちへの家畜分配に遅れて、1994年になってから運転手などには公有財産の分配があった。TLは分配された農機具を転売し、さらに金を足して自分が以前乗っていたトラクターを買った。そして、干し草や燃料用の牛糞などの運搬などの仕事をみつけては、このトラクターを使って稼いだ。しかし、生活は悪くなっていき、資産であった自動車も何度も買い換えを繰り返すうちに最後には250ccバイクに代わってしまった。この間に妻も亡くなった。数年前、3人の子どもを連れて再婚した。相手も一人の娘を連れての再婚であった。

4. デレン郡における生活の現状

4-1. DD家:DDらと共に草原で遊牧生活をすることを選んだOt夫婦

現在のDD家は、デレン郡の中心地から西へ12kmのところにあるトホイ・ヘレム（*Tokhoi kherem*）という土地に冬営用の家畜囲いと倉庫をもち、その周辺を中心的な遊動域として遊牧生活を営んでいる。既に述べたようにDD家の世帯メンバーは、DDとBz、未婚の三男DJのほか、末娘Otとその夫と子である。

Otは1979年生まれで、デレン郡の8年制学校を卒業してからずっと両親とともに

牧畜の仕事に従事している。Otは学校の成績が優秀で、県の中心地の10年制学校へ編入することを希望していたが、子どもたちの中でもことにOtをかわいがっていたDDが娘を遠方へやるのを渋って進学させなかった。Otは首都の大学で勉強することにも憧れを抱いているが、10年の課程を修了していないので大学の受験資格もない。DDは今では、娘を進学させなかったことは自分の過ちだったと後悔している。

Otは8年生のとき、同級生の仲のよい女の子たち（16-18歳）と「20歳になるまで決して結婚はしない」と互いに誓い合ったことを覚えている。けれども実際には卒業前後に何人かの仲間が出産し、卒業後1年以内にほとんどが結婚してしまった。Ot自身はBJの妻の系譜上の弟から熱心に求婚され、1998年に一緒になった。夫となった人は、BJの妻の姉の息子として生まれたが、母方祖母の養子となっている（図2参照）。

モンゴルの牧民社会では若者が結婚すると自前のゲルを建て、ある程度の自律性を備えた世帯単位をなすのが一般的である。しかしOtの夫はらのゲルに住み込み、若夫婦は消費の面でも家畜などの財の所有の面でもDD家から世帯を分離しなかった。この背景には、DD家が第1バクの中で比較的経営規模の大きい豊かな世帯であり、Otが実家からの経済的援助を期待できるのに対して、夫の実家も養家もほとんど家畜をもっていない上、女性世帯であり、老いた養母はBJ家と家計を共にしているという事情がある。

Otの夫がDD家に来て1年後にDD家はゲルを新調し、宴会を開いて親戚等を招いた。モンゴル語で「結婚する」は、「ゲル（*ger*）」という名詞から派生した動詞をもちいて「ゲルレフ（*gerlekh*）」と表現される。ゲルの新築祝いによって2人の結婚は親戚や地域の人々に認められたが、Ot夫婦はDDらから別居することなく、新しいゲルにDD夫婦らと共にみんなで住み替えた。デレン郡の人々からは、Otの夫はDD家の入り婿として認知されている。

Ot夫婦には3歳になる息子が1人いるが、2人は口を揃えてこれ以上子どもは生まないという。理由は「養育できない」（*Tejeej chadakhgu'i*）からである。2人が言うには、子育てでは、幼時から新しい衣服を買い与えたり、学校に行くようになればカバンや靴、衣服などを絶えず新調してやらなければならない。子沢山の兄BJの困窮を引き合いに出して、自分たちは息子を大切に育てたいので、これ以上の出産はしてはいけないのだという。しかし、家計の状況がよくなれば、もっと子どもをつくるかもしれないと語った。

市場経済化時代の若い夫婦の育児観は、国家によって多産が奨励されて人々もそれに応じた社会主義時代とは異なっていることがわかる。多くの子どもを生んだ母親が表彰されるのは現在でも変わらない。しかしOtらは、大学進学率が高まっている近年の社会状況にかんがみて、草原に住んでいても高等教育が必要だと考えている。そして、教育への投資などをしてやることができる範囲で子どもは生むべきで

あり、家庭の経済状況にあわせて産子数を調節しようと考えている。

4-2. DD家と子どもたちの世帯との関係：草原と定住区を行き来するBJ家とTL家

この節では、定住区に住む既婚の子どもたちの家族の現在の生活を、DD家との関係とともに記述していく。

長男BJの家族は現在、郡の中心地で暮らしている。その居所はDD夫婦が退職前に郡の中心地に住んでいた頃に利用権を確保した土地で、図4のように板塀で囲われた敷地内にいくつかの木造建造物がある。BJはゲルも所有していて、気候やその他の都合で木造の小屋に住んだりゲルを建てて移ったりしている（写真5）（写真6）。

世帯のメンバーは、BJとその妻（38歳）、妻の老いた母、そして8歳から18歳までの5人の未婚の子どもである。妻は長靴を作って売っていて多少の稼ぎがあるが、BJには現金収入を得られる仕事はない。BJ家の唯一の安定した収入源は、同じ敷地内の別の小屋に住んでいる妻の母の年金である。

18歳の長男（写真7）は2001年の秋、郡の中心地の南西郊外の草原にテントを張

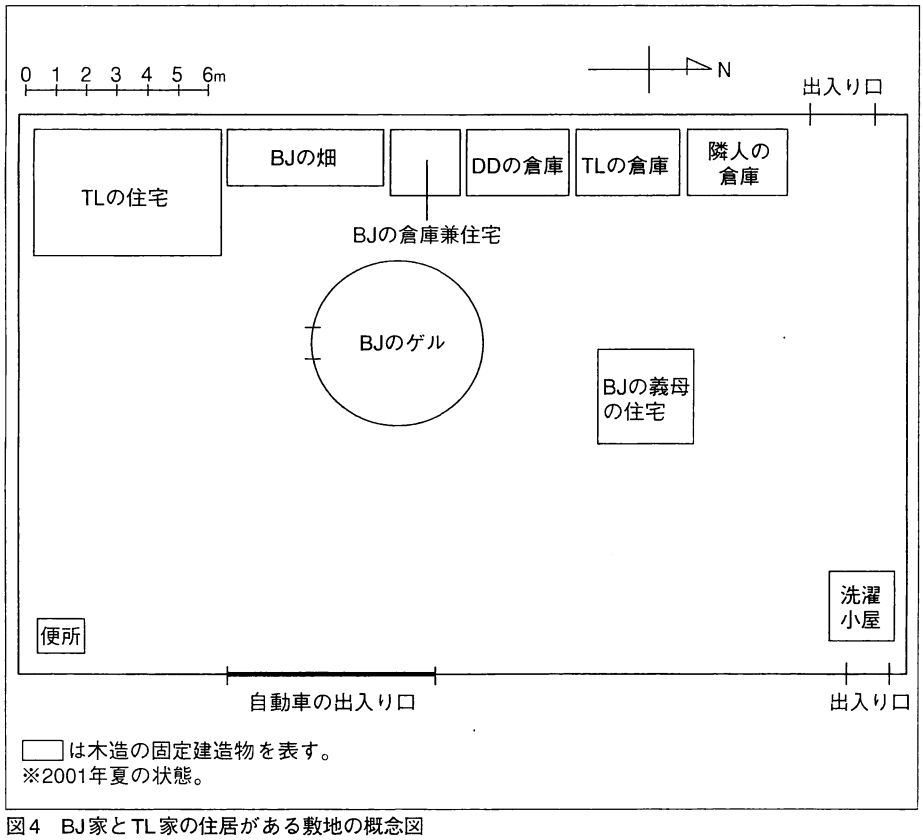

図4 BJ家とTL家の住居がある敷地の概念図

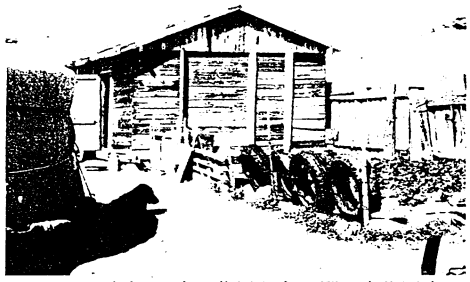

写真5　BJ家とTL家の住居がある郡の定住区内の敷地。左はBJのゲル、奥はTL家の住宅、右はBJ家の畑。

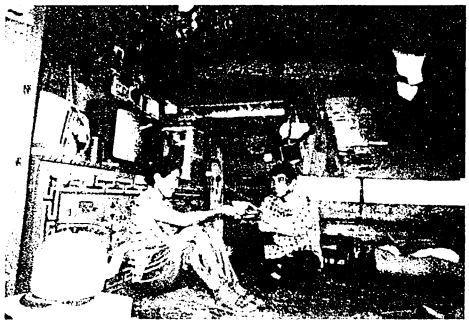

写真6　BJの倉庫兼住宅。2001年の夏にはゲルに住んでいたが、降雨で浸水したので秋には住み替えた。電気が通っていて、電熱式調理器具やテレビがある。

写真7　18歳になるBJ家の長男。

り、1人で寝泊まりしながらタルバガ（*tarvaga*）とよばれるマーモットの罠猟を行っていた。タルバガの毛皮は帽子などの材料として買い取られるので、タルバガ猟は現金収入源となるのである。彼は新学期を前にして、弟妹たちが学校へ通うのに必要な金を稼ぐためといって、タルバガ肉の蒸し焼きを食べて過ごしながら来る日も来る日もタルバガの穴に鰐口型の罠をしかけていた。その長男もその秋のうちに徴兵されて任地のウラーンバートルへ出かけていった。

これまで記してきたことからもわかるように、BJ家の暮らしは楽ではないが、生活の支えとなっていたのは財産としての家畜である。BJは以前ネグデルの牧民だったこともあって、ネグデルの解散時にまとまった数の家畜を私有財産として得ていたことはすでに述べたとおりである。これまでのBJ家は家畜に依存して生活することができたが、1999年から2000年にかけてゾドに襲わ

年	所有者				合計
	DD	BJ	TL	知人	
1999	226	180	107	0	513
2000	207	18	23	10	258
2001	216	17	20	6	259

表3　DD家が管理する家畜の頭数の変化（頭）
*Tgの所有する家畜の頭数はDD家の家畜頭数に含まれている。

れ、しかもその後に家畜泥棒に遭ったために家畜の大半を失い、今ではその数もわずかとなってしまったのである（表3参照）。

BJ家の家畜とDD家の家畜とはこれまでずっと一緒に一群として管理されてきた。BJ家の人々が定住区に住むようになってからは、DD家の人々が1年を通して家畜と共に生活し、世話している。ところが、BJは自分の職業をマルチン（*malchin*）［牧民、牧人］だと考えていることが筆者が行ったアンケート調査[11]によってわかった。アンケートの「職業」欄に、BJと同じような立場の他の人々が「職なし」（*ajilgu'i*）と書いたのに対して、BJは「*malchin*」と書いたのである。実際、BJ家は2000年まで毎年5月に学校が夏休みになるとゲルをたたんで家族で草原へ引っ越し、DD家のゲルの隣にBJ家のゲルを建て、9月の新学期までを草原で過ごしてきた。この期間は1年の約3分の1にあたる。

2001年には、引っ越しをせずに子どもたちだけがDD家に長期滞在した[12]。夏休み中のDD家には、BJの子どもたちに加えて次男TLと長女Tgの子どもたちも泊まり込んでいて、DD家の大人たちの指示に従ってさまざまな仕事を手伝っていた。夏休み中、BJとTLはそれぞれ3日に1度ほどの頻度でバイクに乗ってDD家を訪ねた。BJの方は最近生活のためにバイクを売ってしまったのであるが、DD家を訪問する時にはそのバイクを借りて来ていた。妻や、TLの場合には幼い2人の子どもたちを伴って来ることもよくあった。そして、週に1度以上はBJとTL自身がDD家に1、2泊した。

9月の新学期が近くなると子どもたちは定住区の家へ戻り、BJとTLがDD家を訪れる頻度も減った。けれども、郡の中心地からDD家までは子どもたちが徒歩で行き来できる距離だったので、子どもが夏休み中に草原から家へ一時帰宅したり、学校期間中であっても週末に草原のDD家を訪ねることも行われていた。このことから、草原のDD家と郡の中心地の息子たちの家族との間には通年、頻繁な行き来があるといえる。

ところで、BJ自身がマルチン（牧民）であると考えているにもかかわらず、BJ家が定住区に生活の本拠地を置いているのは、2001年現在BJ家の子どものうちの3人が定住区にある学校に通っているためである。デレン郡の8年制学校には併設の寮があるが収容人数は限られいる。また、BJ家には家族が一緒に暮らしたいという希望が親子両者にある。このためBJ家は2000年まで家族全員で季節的に定住区と草原を往復するという生活様式を選択し、季節的な移動を行ってきたのである。

2001年の冬の計画として、BJは家族と離れて1人で草原に出て自分で家畜を世話しようと考えている。これまでBJ家はいつもDD家と一緒にキャンプしてきたが、今回は友人の冬営地で友人の家と2世帯で冬営するつもりである。このため、秋の間に、その友人が所有する冬用の家畜囲いを修繕、整備する仕事を友人と協力して行っていた。

次に、次男のTLの世帯に目を移そう(写真8)。TL家は1999年の夏までの数年間、DDと一緒にキャンプして通年、草原で遊牧生活していた。定住区に引っ越したのは、1999年の秋に長女が小学校へ入学した時である。それでも、2000年の夏にはBJ家と同様に再び草原に出て、秋から翌年の春までは定住区にという季節的な住み分けをした。

写真8　TLとその子どもたち。DD家を訪問中。

郡の中心地でTL家はBJ家と同じ敷地内に暮らすが、家計は別である。TL家の世帯のメンバーはTL、TLの後妻（32歳)、5歳から10歳までの4人の子どもであり、定住区においても木造家屋やゲルを状況によって使い分けて住んでいる。生活はやはり楽ではないが、TLは2001年の夏から秋にかけては郡の中心地にある私営ガソリン・スタンドの給油員として週に3日働いていた。妻は無職である。

TLの妻の両親の世帯も、あまり多くはないが家畜を所有していてデレン郡内で遊牧を営む「牧畜世帯」である。TL家の所有する家畜は、夫婦双方の実家に分割して預託されている。DD家の人々がTLの妻をよく思っていないこともあり、TLの妻は持参財としての自分の家畜を自分の両親に預託しているようである。TL夫婦はそれぞれの連れ子である最年少で同い年の5歳の娘たちを連れて、4人でバイクに乗ってはDD家と妻の実家の両方をしばしば訪問しているという。

最後に、県の中心地に住む長女Tgとその家族についてである。1968年生まれのTgは、県の中心地で商店の雇われ売り子をしている。役場の測量係である夫と、学校に通う3人の子どもと5人家族である。5人は、結婚の時にDD夫婦がTgのために権利を買い与えた屋敷地で、木造の家屋とやはりDD夫婦が買い与えたゲルとを季節的に使い分けている。夏には風通しのよい木造家屋に住み、冬になると暖房効率がよいゲルを建てて移り住むのである。DD夫婦はTgが結婚するときに、女性は「他人の手の下」(*Khu'nii gar dor*)、つまり夫の言うとおりに夫に合わせて暮らすものなので、いざというときに困らないようにと2人の息子よりも多くの財産を与えたという。

家畜もウシ3頭をはじめとして、ウマ、ヒツジ、ヤギをある程度与えたが、次々と食べていくうちにゾドにも遭い、今ではヒツジとヤギあわせて数頭を残すのみとなってしまった。これはDD家に預託されている。

県の中心地はDD家の冬営地からは55キロの距離があり、その間には公共交通がなく、またTg夫婦は常勤の職に就いているため、2人がDD家を訪れる機会は少ない。その代わり、DD家、BJ家、TL家の人々が病気治療や商売など様々な理由で県の中心地を訪れることがよくあり、そのときには皆Tg家に滞在するのである。

DD家、BJ家、TL家、Tg家の4つの世帯は、それぞれの居住地や家族メンバーの能力の特性を生かして互いに協力しあっていることがわかる。草原のDD家はほかの全世帯の家畜を預かっている。Tg家の暮らす県の中心地には、郡部では受けられない行政、医療、教育サービスが整備されている。また、郡の中心地よりも県の中心地では日常雑貨の価格が安く、反対に牧民が畜産物等を売る場合には県の中心地でより高く売れる。さらに、首都ウラーンバートルへ行くのにも県の中心地から乗り合いタクシーが出ている。このため、DD家、BJ家、TL家の人々にとって、県の中心地で滞在でき、頼りにできるTg家の存在意義は大きい。

労働力の面では、BJ家にはすでに大きくなって一人前の労働のできる子どもがいる。BJ家の大きい子どもたちは夏休み以外でも、2人くらいで連れ立って12kmの道のりを歩いてDD家を訪ねては家畜管理の仕事を手伝っていた。タルバガ捕りの長男は7年生になったころから学校にあまり行かなくなっていて、ゾドで大変だった1999年の冬から2000年の春にかけては、DD家に住み込んで日帰り放牧の見張りなどをしてよく働いたという。TL家、Tg家の子どもたちはまだ幼く、夏休みにDD家に滞在していた間も仕事をさぼって叱られたり、ホームシックで泣いたりしていたが、やがてDDとBz夫婦が牧畜の仕事から引退する頃には彼らも成長してよい働き手となっていくのかもしれない。

4-3. 家族内での協力関係のバリエーション

これまでDD家とそれに連なる一つの家族内部での世帯間協力の様子を記述、分析してきたが、ここで他の家族の事例を取り上げて、家族内での協力関係のバリエーションを示しておく。

2001年秋にDD家の近隣に秋営していたA家は、家畜合計420頭を所有し、夫A(31)、妻(28)、長女(8)、長男(7)、次女(4)の5人が1世帯をなして一つのゲルに住む「牧畜世帯」である。夫婦は、ネグデル時代にもネグデルの家畜管理労働者として働いていた。ところが、9月1日の新学期を前にして、妻は子どもを連れて郡の中心地へ引っ越し、夫Aが家畜と共に草原に残った。Aは、両親の遊牧キャンプに家畜を連れて移動し、両親の家に住み込んだ。Aの両親の世帯はA家の秋営地から1km弱の地点にAの弟と2世帯でキャンプしていた。A家では夫方の両親と協力することで、1人では難しい草原での暮らしと家畜管理を夫1人が引き受けて、妻は子どもの教育のために定住区に移ったのである。

一方、もう一つの近隣世帯であるＢ家は、家畜合計340頭を所有し、夫Ｂ（42）、妻（39）、長女（14）、長男（13）、次女（12）、三女（8）の6人が1世帯をなして一つのゲルに住む「牧畜世帯」である。Ｂ夫婦もネグデル時代にはネグデルの家畜管理労働者として働いていた。Ｂ家の場合、ゲルの他に郡の中心地に木造家屋を保有しているということで、新学期になると通学中の子どもたちだけが郡の中心地へ移った。子どもたちはその木造家屋に住み、自炊して学校へ通うという。

このような世帯間での協力や家族の別居がこの地域の特殊な状況ではないことを、他地域の事例から示すことができる。アルハンガイ県チョロート郡バヤン・ハイルハン行政区（バク）における1997年5月から1999年4月にかけての断続的な長期調査でも、学校教育を巡る世帯間協力（風戸 1999:40）ならびに家族の別居が見られた。バヤン・ハイルハン行政区の中心地には1997年度には3年制の、1998年度には4年制になった公教育学校があり、行政区の中心地が定住区となっていた。

世帯間での協力としては、世帯主同士が父-息子関係にある2世帯が、9月から5月までの通学期間中、草原に住んで両家の家畜を預かる役割と、行政区の定住区に住んで両家の子どもを預かる役割とを分担していた。父は64歳、息子は32歳であるがどちらの世帯にも通学中の子どもがいた。1997年の9月初旬から翌年5月初旬にかけては息子の世帯が子どもを預かって定住区にゲルを置き、父の世帯が家畜を預かって草原にいたが、翌年にはその役割分担を交代した。なお、2年目に定住区で両家の子どもを預かっていた父の世帯には、便乗的に娘の子ども1人も預けられていた。

家族の別居の例としては、バヤン・ハイルハン行政区内のある「牧畜世帯」はゲルを2つ所有していて、学校期間中には草原での生活を維持したまま、もう一つのゲルを行政区の定住区に建てて通学中の子どもたちだけが定住区のゲルに移り住んだ。子どもたちは月曜日から金曜日まで自炊しながら学校に通い、金曜日の授業が終わると実家に戻り、月曜日の朝は実家から登校していた。

このように、ドンドゴビ県デレン郡のみならずモンゴル国の地方に住んで家畜を維持する多くの人々にとって、親戚関係にある複数の世帯間で協力関係を結んだり、家族が一時的に別居したりすることは、家畜管理上の必要と共に子どもに学校教育を受けさせるという目的のために都合されている。遊動生活を送る「牧畜世帯」の子どもが、1年の3分の2にも及ぶ長期間連続して1地点に固定された定住区にある学校に通学することには原理的に困難がつきまとう。しかしながら、社会主義時代には子どもの教育義務を怠る両親に高額の罰金を科すことなどによって義務教育制度が支えられていた。現在の社会変容下では、学校を中退する子どもやまったく入学しない子どもも多い。一方で、子どもが教育を受けられるようにと、居住地選択を巡る世帯間協力や家族の別居を含む様々な努力をする家族の姿が各地に見られるのである。

5. おわりに

②の時期、DDとBzは子どもの教育の都合などによって数年ごとに草原と定住区を行き来しながら生活していた。③の時期には、DDの長男BJと次男TLの世帯がやはり草原と定住区の両方を生活の場としている。子どもが幼い時には草原でDD家と一緒にキャンプして牧畜生活を営み、子どもが学校へ通うようになった後は季節的に草原と定住区を往復してきたのである。

このように、子どもの通学と関係する家族の成長段階によって、草原と定住区を生活の本拠地として使い分けることが、DD家とそれに連なる家族たちの中では時代を越えて行われてきた。ただし、②の時代にはDDとBzの2人は定住区でも職を確保することができたが、現在は定住区で仕事をみつけるのは難しい。社会主義時代には地方にも国営工場や公共施設が多かったが、これらの雇用は今はない。BJとTLは民主化によって失業し、その後は地方にひしめく多くの失業者たちと職をめぐって競争しなくてはならない。このような状況のなかで、BJ家、TL家は子どもの通学や現金収入の得られる仕事を優先させて定住区に生活の本拠地を置きながらも、移動性の高い生活を続けているのである。

これらの世帯の家計は困窮している。それでも、家族の食料を賄うための家畜を維持していることが、生活の支えとなっている。BJ家、TL家、Tg家は役場の登録上は「非牧畜世帯」であるが、モンゴル人にとって主食の位置を占める重要な食材である肉の調達に関しては、DD家などに預託した自分の家畜を中心に消費している。これに加えてDD家が、BJ家、TL家、Tg家のそれぞれに食料としてときどき家畜を与えて援助している。労働の面では、BJ家、TL家、Tg家がDD家に協力している。BJ家、TL家、Tg家の子どもたちは夏中を草原で過ごして牧畜の仕事を手伝っているし、BJは牧民を自認して頻繁にDD家を訪れては家畜管理の仕事に参加している。

DD家とBJ家、TL家との関係は、家族メンバーの成長段階のずれを利用した世帯間協力であるが、この他にアルハンガイ県での事例に見られるような通学児童をもつ世帯同士が協力関係を結ぶ場合もある。また、BJ家の2001年の冬の予定や他の世帯の事例に示されるような、一つの家族が草原と定住区に分離して暮らしながら、子どもの教育と家畜の管理の両方をこなすという選択肢もある。

ここで注目したいのは住居である。モンゴルの地方の人々は居住地に関係なくゲルを所有している。定住区でもゲルに住んでいる人は多い。このような移動性の高い住居を利用していることが、定住区にも草原にも自在に居を移すことを可能にしている。住居に関してはさらに、ゲルと木造住宅や2つ以上のゲルなど複数の居住設備を所有している世帯が多いことも重要である[13]。このことによって、家族のメンバーが草原と定住区に分かれて住むことが可能になるのである。

最初に挙げた問題意識に立ち返ると、開発援助において問題視されている諸変化

のうち、「牧畜への新規参入者の経験の問題」と、「牧畜世帯の経営規模」の2点に関して、次のことがいえる。

モンゴルでは、首都ウラーンバートルなど大都市を除いた地域では、一時的な居住地が草原であるか定住区であるかに拘わらず、家畜とゲルを所有する世帯がほとんどである。そのような世帯は、草原で季節的にキャンプ地点を変えながら遊動的な「牧畜生活」を送ることもできるし、また、草原と定住区との間を行き来することもできる。草原と定住区との間の移動には長期、短期の2つのリズムがあり、各世帯の都合によっていずれかが選択されていることがこれまでの分析からわかった。長期的リズムとは、定住区に数年、草原に数年ずつ住んで両者の間を行き来することであり、短期的リズムとは1年のうち季節によって居住地を変えることである。このことからわかるのは、行政登録上の「牧畜世帯」とそれ以外の区別は一時的な状態を表すものであって、固定的な属性ではないということである。重要なのは各世帯の生活の実態なのである。

次に、民主化以降、新規に「牧畜世帯」となった世帯のメンバーの技術や経験について考えてみたい。このような世帯の例としては、退職後の生活の場を草原に求めたDD家や、失業して一時DD家と共に草原で遊牧生活を行ったTL家が挙げられる。しかし、彼らが決して牧畜の素人だったわけではないことは彼らの生活史を見れば明らかである。①の時期に生まれたDDとBzは遊牧家庭に育った上、ネグデル時代には頻繁に定住区と草原の間を行き来しながら、会計や獣医師を勤める一方、家畜管理労働者もこなしてきた。②の時期に生まれ育ったTLの場合、定住区にある近代教育学校に本人やキョウダイが通学するために一家で定住区に住まう時期が長かった。とはいえ、DD家が数年ごとに定住地と草原とを行き来していたことから、やはりTLもその成長の過程で何度か牧畜生活を体験しているのである。

このように、長期的な視点を導入することによって新規に牧畜に参入した世帯の背景がわかるのである。牧畜への新規参入者が必ずしも経験に欠き、牧畜技術に熟していないとはいえない。むしろ、地方の暮らしにおいては、ある程度の年齢以上の人であれば誰もがその人生の様々な段階で多かれ少なかれ家畜や牧畜の仕事に関わって生きてきたということが、DD家とそれに連なる家族たちのライフ・ヒストリーからは窺えるのである。

2点目の経営規模に関していえば、同居、消費、家畜所有の単位である世帯ごとの経営規模は確かに小さい。所有家畜頭数が100頭に満たない世帯は「貧困世帯」であるという開発援助が提示する貧困ラインに依拠すれば、デレン郡第1バクの牧畜世帯の約半分は貧困に苦しみ、最低限の人間らしい生活を営む権利が奪われているということになる。

しかし、生産活動において実際に協同している複数の世帯のまとまりに注目すると事態は違って見えるだろう。例えば、現在のBJ家は所有家畜頭数が少なく、収入

も少ない貧しい世帯である。けれども、これに対してDD家が食料援助したり、反対にBJ家の子どもたちが牧畜の仕事を手伝ったりすることで相互に協力しあい、BJ家はなんとか生活を維持しているのである。このことからいえるのは、彼らの生活の質は、個々の世帯が所有する家畜頭数のみによって決定されるわけではないということである。モンゴル国の地方の暮らしにおいては、世帯はある程度の自律性をもつ生計単位ではあるが、決して孤立しているわけではないのである。そして、親族関係のある複数の世帯間に経済協力関係が構築、維持される背景には世帯の発展サイクルが関わっている。

これまでの議論から、DD家とそこに家畜を預ける家族をグループとして見るとき、個々の世帯の家畜頭数は少なくても、全体としては自律的な牧畜経営が行われていることがわかった。ただし、注意しなければならないのは、このような相互協力関係にあるグループは固定的でなく、また閉鎖的でもないということである。そのことはTL家が家畜を妻方と夫方の両方の両親に預託していて、夫婦揃って双方の実家を頻繁に訪ねていることからも示される。定住区と草原をまたにかけた世帯間の経済協力関係は、親族と姻族の関係を利用してネットワーク的に拡がっているものと考えられる。本論では姻族などとの関係を扱うことはできなかったが、そのことも含めた世帯間の協力関係の実態の把握は、モンゴルの牧畜の持続的発展の可能性を探る上で不可欠な課題であると考えられる。

附記

本稿は、平成13年度文部省科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））「アジアの山地・森・草原における環境をめぐる『地方の知』と政策に関する人類学的研究」（代表：稲村哲也）および同補助金（特別研究員奨励費）「モンゴル国牧民の季節遊動における社会的ネットワーク生成過程と家畜管理技法～社会変化への対応と生業形態の連続性～」（代表：風戸真理）の研究成果の一部である。

稲村哲也先生は上記研究メンバーに私を加えて真に貴重な調査の機会を与えて下さった。本研究の計画および本論執筆にあたっては、菅原和孝先生、福井勝義先生、山田孝子先生、田中雅一先生をはじめとする京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学講座の皆様、太田至先生をはじめとする同大学院アフリカ地域研究センターの皆様、そして国立民族学博物館の小長谷有紀先生からゼミを含む様々な場でご指導、ご助言を賜った。

ドンドゴビ県での調査は、受け入れ先となったモンゴル国立畜産・経営大学の学長D. バトムンフ氏ならびに同地で調査研究中の京都大学農学部応用生物科学専攻動物機能開発学講座の畜産資源学分野の皆様、東南アジア研究センターの平田昌弘氏、モンゴル国際協力機関（MICO）のエンクチュルーン氏とアムルジャルガル氏による

お支えがあってはじめて可能になったものである。デレン郡役場のT. Narantsetseg氏は郡役場作成の統計資料を提供して下さり、そして何よりもDD家とその家族の皆様は暮らしの中に私を迎え入れて下さった。

アルハンガイ県での調査は平和中島財団の奨学金を受け、モンゴル国立大学社会科学学部人類学・考古学講座に研究生として所属して行われた。現地での指導教官Dr. D. Tumen、文化基金のルハグワスレン先生、バヤン・ハイルハン行政区のGomboragchaa氏ならびにNarmandakh氏にはとてもお世話になった。

以上、ここに記して深く感謝の意を表します。

註

1) 同国の1992年2月までの国名はモンゴル人民共和国である。

2) モンゴル語の意味と表記に関しては『現代モンゴル語辞典』（小沢重男 1983）に典拠する。和訳は［　］内に示す。表記はキリル文字による現代モンゴル語の正書法をもとに慣例によってラテン転写する。ただし、ё =yo、ж =j、й =i、ы =y、о =o、ө=u、у =u、ү=u'、х =kh、ь ='とし、女性母音を示す「'」は第一音節目のみに付す。

3) 本論ではとくに断りのない限り、「モンゴル」という表現でこれら両方の国家、領域、そこに住む人々を指すこととする。

4) 旗（*khoshuu*）とは、県（*aimag*）より下位、郡（*sum*）より上位の分節をなす社会組織で、革命前と革命後しばらくの間は「封建領主権力の私的所有」（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1969-1:257）のもとにあった。

5) 人名の略記については男性は大文字2字、女性は大文字と小文字とする。年齢の数え方は、モンゴルでは大人の年齢は数え年で表現するので、これに従った。

6) モンゴル国所得税法（1997年5月1日施行）第6条により、家畜所有者は前年末の家畜頭数に基づいて課税される。課税に際しては、2001年1月1日に実施された改正所得税法により次の細則に従う。家畜頭数はヒツジに換算するが、その換算値を大家畜（ウシ、ウマ、ラクダ）=5、ヤギ=1.5とする。前年度の家畜頭数（ヒツジ換算）に基づいて、ドンドゴビ県の場合、1頭に対して75トゥグルクが課税される。ただし、所得税法第9条により課税は免除、減額、控除されることがある。詳細は地域によって異なるが、所有家畜頭数の少ない世帯、おおむねヒツジ換算で150頭以下の世帯は課税を免除される。また、同年度に課税対象となった家畜が自然災害、緊急事態、特別伝染病により減少した場合、控除の対象となる。

7) 知人は郡の中心地にある初等・中等学校で教員をしている男性で、彼の妻は郡の自然保護官である。DDとBz夫婦とは血縁関係はないが、頼んでDD家に家畜を預かってもらっている。

[8]「モンゴル人民共和国全体では、1932-36年には大小の寺院、礼拝堂が840あまりあり、そこに9万人の僧侶がいて、そのうち1万8000人が就学年齢に達した児童であった」(モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1969-1:365)。

[9] 小長谷は、*otor*(オトル)の意味とその変化についてゾドとの関連で論じている(小長谷 1983)。

[10] ソ連でペレストロイカが始まるとモンゴルでも経済改革が始まり、牧畜分野の改革として1987年に生産請負制が、1998年に賃貸契約制がネグデルの家畜管理に導入された。

[11] アンケートは、地方の人々の生活の実態をゾドの影響や援助物資の受容も含めて把握することを目的としたものである。

[12] この年、BJ家が草原に移動しなかった理由のひとつはゾドの影響であると考えられる。夏は一般にすべての家畜の泌乳期にあたるため、群れの分割管理や乳製品の加工などを含む搾乳に関わる労働を中心に、牧畜作業が一年のうちで最も多くなる時期である。ところがゾドで家畜が失われたためにこの年には搾乳できる雌ウシがいなく、搾乳対象となるヒツジ、ヤギ、ウマの頭数も少なかったため、労働も例年より少なかったという事情がある。

[13] 首都ウラーンバートルには集合住宅の立ち並ぶ地区とゲル地区とがあるが、松川によれば、首都のゲル地区にも木造家屋とゲルの両方を保持していて、これらを気候によって使い分ける人々がいる(松川 1998:212)。

参考文献

稲村哲也

2001 「特集:モンゴル国家体制変革下の地方・都市・遊牧社会における社会・経済変動」の「序」『リトルワールド研究報告』17:27-31。

小沢重男

1983 『現代モンゴル語辞典』(第1版) 大学書林。

小貫雅男

1993 『モンゴル現代史』山川出版社。

風戸真理

1999 「遊牧民と自然と家畜〜遊動と家畜管理〜」島崎美代子・長沢孝司編『モンゴルの家族とコミュニティ開発』日本経済評論社。

国際協力事業団

1997 『モンゴル 国別援助研究会報告書』国際協力事業団。

坂本是忠

1969 『モンゴルの政治と経済』アジア経済研究所。

Дэрэн сум（デレン郡）編

1980年代後半　*Дэрэн сум.*（デレン郡の紹介冊子。内容から、デレン郡において1980年代後半に発行されたことが推察される。）

利光有紀

1983　「“オトル”ノート：モンゴルの移動牧畜をめぐって」『人文地理』35(6)：68-79。

БНМАУ-ын ШУА-ийн Түүхийн Хүрээлэн（モンゴル科学アカデミー歴史研究所）編

1969［1988］　*Бүгд Найрамдал Монгол Ард Улсын түүх. Гутгаар боть (нэн шинэ үе).* Улаанбаатар.（『モンゴル史1・2』田中克彦監修、二木博史、今泉博、岡田和行訳：恒文社。）

National Statistical Office of Mongolia

2000　*Mongolian Statistical Yearbook 2000.* Ulaanbaatar.

二木博史

1993　「農業の基本構造と改革」青木信治編『変革下のモンゴル国経済』アジア経済研究所。

松川　節

1998　「移住と定住のはざまで」佐藤浩司編『住まいをつむぐ』学芸出版社。

UNDP

2000　*United Nations Inter-Agency Appeal for Mongolia, Dzud 2000, An Evolving Disaster.* http://www.owc.org.mn/zud/donor/appeal.htm.

吉田順一

1980　「モンゴル遊牧の根底」『モンゴル研究』11：39-49。

1982　「モンゴルの遊牧における移動の理由と種類について」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』28：328-342。